瀋陽だより

2015 年 9 月

報告者：東北育才学校
高井　奈央子

育才学校の入学式

日本では入学式といえば 4 月ですが、中国では欧米と同じく 9 月に入学式があります。そのため、7 月に高校を卒業した 3 年生たちは、約半年の間、日本の語学学校で留学の準備をすることになります。この半年のブランクを時間のロスとみるのか、有意義な準備期間と見るのかは本人の価値観と行動次第ですが、このタイムスケジュールのギャップを乗り越えて日本留学という選択肢を取った生徒たちの胆力は並大抵のものではありません。

今年も千人を超す新入生が東北育才学校に集まりました。中等部と高等部が合同で行う入学式は、高等部キャンパスにある体育館で行われたのですが、生徒の数が多すぎるため、新入生と教職員、一部の保護者だけで満席になってし

まいました。

写真を見て分かるように、制服は男女ともにポロシャツとズボンで、運動服を兼ねています。頻繁にデザインの変更も行われているようで、今年の中等部は写真奥、紺色のシャツを選択したようです。引き締まって見えていいと思います。そして、男女ともにズボンということも関係あるのでしょうか、こちらでは床にきちんと座るときは、胡坐です。

式典の内容は日本と大差なかったと思います。学校長の挨拶、先輩代表の歓迎の言葉など、詳しい内容は分かりませんでしたが、入学式の意味合いとしては、日本とほぼ同じだと思いました。

ところでこの体育館、普段は教職員のレクリエーション施設として活用されています。私は、雨天時の体育の授業に使われているのだろうと思っていたのですが、生徒に聞いたところ、そんなことはなくて、雨が降ったら体育の授業は自習だということでした。もちろん、休み時間に生徒がここでレクリエーションを楽しむこともできないそうで（生徒たちは密かに不満です)、日本人の私にとってはちょっと不思議に思われる住み分けが行われているようです。

写真には入り切りませんでしたが、上部には大きなモニターが 2 つあって、映像を映したり、音楽をかけることができます。式典が始まる前の時間はずっと、東北育才学校の PR 映像が繰り返し上映されていました。クオリティの高さからして、おそらくプロに依頼して作成したものだと思われます。TV の CM のように編集テクニックが駆使された映像から、相当お金をかけて制作されたものだと思われます。

この学校は東北三省屈指の進学校ということで、資金も相当潤沢だと聞いているので、そこから捻出されたのかもしれません。あるいは、割と富裕層の子弟が多いため、保護者の負担ということも考えられます。中国は社会主義を標榜していますが、こういうところは日本の方がよほど社会主義的だと感じます。その是非はともかく、「これを伸ばす」と決めたら徹底的に資金や労力を投入する、それが大陸の考え方なのでしょう。

入学式が終わって、それぞれ迎えに来た保護者と一緒にランチに出かける生徒たちの姿は、やはり万国共通でした。

瀋陽で暮らす

1. 出かける

瀋陽に来て１年ほど経ちますが、最初は買い物に出かけるのも一苦労でした。私自身が極度の方向音痴であるということもありますが、第一の理由は交通事情の違いに原因がありました。

写真の通り、瀋陽では駐車スペースは歩道の一部を切り取るような形で取られていることが多く（特に中心部）、車が歩道を走行することはよくあります。また、電動バイクや電動モーター付きの二輪車も車道と歩道の両方を走ります。車は右折は信号の色に関わらず常時可能というルールも、慣れないうちは「怖い」というのが正直な感想でした。

慣れれば、地元の人に上手く紛れて道路を渡れるようになりますが、そうなるまでには少々時間がかかりました。驚くほどぎりぎりのスペースで、後ろからバイクに追い抜かれることも珍しくないこの国では、クラクションを鳴らして歩行者に注意を促すのはむしろ親切なのではないかと感じます。

そんな交通事情のせいか、小学生ぐらいの子どもが一人、あるいは子どもたちだけで行動している姿はほとんど見かけません。いつも保護者がしっかり手を繋いで道を歩いています。私から見える範囲内ではありますが、中国の労働環境には日本よりもずっと余裕があり、家族優先が当然とされているので、子どもと手を繋いで登下校することが可能な社会的条件が整っているといえます。

育才学校の先生方も、「今日は小学校が午後から授業がないから」と、お子さんを迎えに行き、その子とともに育才学校の食堂で食事を取っていることもよくあります。特に夏休み前はそのようなことが多く、午後から育才学校の敷地内で遊んでいる子どもたちの姿をよく見かけました。

子どもは家族全員、社会全体で面倒を見るものであり、また子どもが、走ったり、騒いだり、急にトイレに行きたがったりするのが当たり前のこととして広く受け入れられています。日本だと、公共の場における子ども、或いは子連れの女性（日本では多くの場合、この役目は女性が担っていると思います）に対する目線は大変厳しいものがあります。もちろん、中国でも、何でもOKというわけではないし、公共の場でのマナーを守ることも大切ですが、「責める

ような視線」に怯えずにおおらかに日々を過ごしている姿は羨ましくも感じます。

2. スーパーに行く

旅行ではなく、暮らすとなると避けて通れないのがスーパーでの買い物です。私の暮らす寮から徒歩 15 分程度のところに「大潤发」という大手スーパーがあります。聞くところによると「とても儲かる」という意味の名前だというそのスーパーは 3 階建てで、家電から衣服、洗剤などの日用品、生鮮食品まで、すべてそろっているので便利です。防犯上の都合なのか、商売的な戦略なのか、家電と衣料品のある 3 階からしか入店できないのが少し面倒なのですが、ここに来れば大抵のものは手に入るという安心感があります。

日本のシステムと違っているのは果物や肉の買い方です。基本的に量り売りで、果物なら果物コーナーで、自分で種類別に袋に詰め、係員に渡して値札を貼ってもらわないと、レジで会計をしてもらえません。広大な国土を持つ中国は、果物の種類が豊富且つ安価で、日本では見たことの無いようなものもたくさんありました。写真の「油桃」は硬めのプラムのような食感でした。夏場は、日本ではほとんど冷凍物でしか見られないライチが生のまま陳列されていましたし（産地は海南）、スイカも山と積まれていました。私は車も腕力もないので、重い果物を購入するときは他の買い物をどうするか考えなければならないというのが難点です。

魚売り場は、左写真のような水槽に魚を泳がせているのが「新鮮」の証なのだそうです。魚を捌けない私には関係がないのですが、内陸の瀋陽は川魚がメインで、売り場をのぞいても見知った姿形の海の魚はありません。

冷凍食品コーナーに、唐揚げ用の冷凍太刀魚が売られていて、それならたまに学校の食堂でも出てきます。しかし、基本的に海の魚を食べる機会はあまりありません。